

ナオミ・フォンテーヌのテキストに見る ケベックの先住民社会

An Indigenous Society in Québec: Through Naomi Fontaine's Texts

小倉和子
OGURA Kazuko



Key words: ナオミ・フォンテーヌ、先住民文学、イヌー、居留地、ケベック
Naomi Fontaine, indigenous literatures, Innus, reserves, Québec

Abstract

Born in 1987, Naomi Fontaine published her first novel *Kuessipan: à toi* in 2011, which attracted the special attention of the literary world of Québec. This Innu-born writer who lived on the Uashat Indian Reserve until the age of seven to settle in Québec City with her family, speaks in French “à toi” (to you, the second person in the text) and to her readers about the difficult reality of the life in the reserve, the traditional life lived by her ancestors, her prospective vision, etc. Through the reading of this book, we will examine the Innu society represented by this author as well as the messages she transmits to the readers. We will also ask ourselves whether the Innu literature in general, in which Quebecers have only recently become interested (since the beginning of the 21st century), will remain one of the indigenous literatures in Québec or will become an integral part of the “Québécois literature” to participate actively in its “intercultural” society that Gérard Bouchard proposes.

1. はじめに

アンテルキョルチュレル
間文化社会を標榜するカナダ・ケベック州において、住民の約8割を占める仏系と、少数派の英系、そしてネオ・ケベコワとも呼ばれるさまざまな出自をもつ新移民たちとの共存については、すでに社会学、政治学、教育学、文学、芸術等の分野で多くの研究が行われ、実践もされている。しかし、これらのどの集団よりも早く、多くの人類学者たちが認めるところによれば、今から3～1万年前にベーリング海を渡ってシベリアからやってきてこの地に住み着いたとされる先住民たち（カナダ大使館、2015）との関係についてはどうだろうか。文学に関するかぎり、先住民たちが文字を使って自らを語るようになり、ケベック社会がそれに関心を向けるようになったのは、今世紀にはいつてからのことにすぎない。先住民たちはそこで何を語り、読者たちはそこから何を汲み取ろうとしているのだろうか。

本稿では、アメリカ・インディアンの1部族であるイヌー（Innus）¹⁾ 出身の若手女性作家ナオミ・フォンテーヌ（Naomi Fontaine, 1987-）が2011年に発表した『クエシパン、あなたへ』（*Kuessipan: à toi*）を例にとり、そこに描かれた居留地（*réserve*）の情景や、同胞に語りかけるフォンテーヌの口調、彼女が同胞やケベック社会と築こうとしている関係について考察したい。

2. ケベックの先住民とナオミ・フォンテーヌの生い立ち

まずは、ケベック州に住む先住民やナオミ・フォンテーヌの生い立ちについて概略を紹介しておきたい。

現在、ケベック州に住む先住民は約10万人と言われている（池上、2009、p.119-120）。カナダの先住民にはアメリカ・インディアン（自らは「ファースト・ネーションズ」と呼ぶ）、イヌイット、メティス（インディアンまたはイヌイットとヨーロッパ系住民の混血）がいるが、イヌーはインディアンのアルゴンキン語族に属する1集団であり、多くはサグネからコート・ノール地方、さらにラブラドル半島東部にまで住み着いている。16世紀半ばにフランス人探検家のジャック・カルティエ（Jacques Cartier, 1491-1557）がサンローラン河を遡ることに成功し、その後、17世紀にはこの地にヌーヴェル＝フランス（新フランス）と呼ばれるフランス国王直轄の植民地ができるが、イヌーはヒューロン・インディアンと並び、当初からヨーロッパ人ともっとも接触が多かった部族の1つである²⁾。

ナオミ・フォンテーヌは1987年に、ケベック市からサンローラン河を250kmほど下ったコート・ノール地方のセティル（Sept-Îles）にあるウアシャット（Uashat）³⁾のインディアン居留地で生まれた。母親が彼女を身ごもっていたときに父親が交通事故で死亡したため、父の顔を知らずに生まれ育った（Guy, 2011）。彼女が7歳のとき、母親が「子どもたちの人生にチャンスを与えるため」一家で居留地を出てケベック市への移住を決断する。ナオミはケベック市の学校に通い、その後、名門のラヴァル大学でフランス語教員の資格を取得し、居留地に戻って中等教育機

関でフランス語教員を務めながら創作活動に従事する。後にケベック市に戻って大学院に進学している。

本稿で取り上げる『クエシパン、あなたへ』は2011年、彼女が23歳で発表した「小説」である。若書きながら、翌年のフランコフォニー五大陸賞の候補作として残った10点のうちの1点で、Monique Durandの言葉を借りれば、ケベックの文学界に「小さな地震」を引き起こした(Durand, 2011)。ハイチ出身のケベック作家で、アカデミー・フランセーズ会員でもあるダニー・ラフェリエール(Dany Laferrière, 1953-)は、メモワール・ダンクリエ社から刊行されたこの本の表紙に「これは標的的中心(cœur)、すなわちわたしの心臓(cœur)を射るために、標的を見る必要すらない射手による本だ」と、手放しの賛辞を送っている。そこに描かれていることには脚色された部分も含まれているため「小説(フィクション)」と銘打たれているが、ストーリー性に重きが置かれているわけではなく、むしろイヌーの生活ぶりや風景がスケッチのように切り取られ、断章形式で綴られた作品である。タイトルにある「クエシパン」はイヌー語で「あなたへ」、「あなたの番」という意味である。フォンテーヌが語りかける相手である「あなた」とはいったい誰で、彼女は何を語りかけるのだろうか。

3. 居留地が抱える諸問題

18世紀半ば、新大陸における仏系と英系の激しい抗争の結果、英国が現在のカナダの地を統治するようになると、各地にインディアン居留地が設けられるようになる。ヨーロッパその他の地域からの入植者たちが入ることのできない、ファースト・ネーションズ専用の土地である⁴⁾。1876年には最初の「インディアン法」が定められ、認定インディアンは定められた居留地に住むことを条件に、住宅や教育、生活費の扶助を政府から受け、税金も免除される(浅井、2004、p. 108)。現在では居留地の外に住む先住民も年々増え、居留地自体の生活条件も徐々に改善されてきているとはいえ、保護と特権享受が表裏一体となった、このきわめて閉鎖的な空間がさまざまな問題を抱えていることは否定できないだろう。よく指摘されるのは、アルコール依存症、麻薬中毒、失業率の高さ、家庭内暴力、自殺などである。ナオミ・フォンテーヌは居留地から大都会に出てきた「青白い顔の」1人の青年に次のように語りかける。

大都会では、誰でもない人になるのはずっと簡単ね。あなたがすれ違う人々は皆、あなたのことを何も知らない。あなたのことをぼんやりと見るだけで、何か別のことを考えている。居留地という、あなたのことやあなたの家族、友だちのことを知っている村を離れて、この町の虚無の中で見知らぬ人として暮らすようになってようやく数ヵ月。あなたのアパートはあなたのもの。ただ同然で買った使い古しの家具も然り。台所の隅にある丸い木製のテーブル。座る人のいない2脚の椅子。青いフェルト製の長椅子。ブンブン唸って、食糧を冷やすかわりに凍らせてしまう冷蔵庫。部屋には、近所の建物の正面に面した窓がある。夜は、高

速道路を走る車の音が聞こえる。それは以前あなたが住んでいたところとは違う。(Fontaine, 2011, p. 29⁵⁾)

読者は最初、「あなた」がなぜ居留地を離れ、大都会で一人暮らしを始めたのか知らない。多くの若者同様、都会にあこがれを抱いて、新天地で生活を始めたのだらうくらいにしか考えない。しかし、じつはこの青年が「痩せて、頬がこけ、見つめられたくないので、自分も相手を見つめようとしないうどおどとした目つき (p. 29)」をしていることはこの断章の冒頭から明らかにされている。新しいことに挑戦しはじめた人間にしては、あまり高揚感が感じられないのである。ホームシックにでもかかっているのだろうか。

新居となったアパートの詳細な描写に続くのは、過去の暮らしと現在のそれとの執拗なまでの対比である。住人全員が自分のことを知っていた親密で閉鎖的な空間と、自分のことを知る者がいない、自由と孤独と自己責任の世界。フォンテーヌは「あなた」に次々と、兄弟や級友たちと遊んだ少年時代や、島の海岸で「無限」と向き合ったキャンプのこと、12歳ではじめて体験した「ブラックアウト」などを想起させていく。そして読者は次第に、居留地の若者の鬱屈した感情や、先の見えない曖昧な現実から目をそらせようとしておぼれていくアルコールや麻薬などの実態について、静かな文体の中で知らされていくことになる。「ある晩、あなたは脇腹、お腹の下に、言うに言われぬ痛みを感じた。それは身体を突き刺す金属の棒のようだった。あなたは病院でたくさんの検査を受けた。すぐに悪いところが見つかった。肝臓だった。破壊されていた。肝臓が大人しくしているのをよいことに酷使されたせいで、耐えきれなくなったのだ。今や、即刻やめなければならなかった。あなたは二十歳になっていた (p. 31-32)」。

かくして「あなた」は「他所でやり直すこと、試してみること、頑張ってみること。生き残るために治療すること。自分自身の身体から生還すること (p. 32)」を試みることになる。フォンテーヌは居留地出身とはいえ、幼少期にそこを離れ、都会で育ったため、居留地の現実をある程度距離をもって眺めている。とはいえ、自分もまた同胞なので、その視線はけっして突き放したものではない。内部にいる者が抱く感情と外部の者がもちうる客観的な視線のはざままで、そこを往復しながら書いている。居留地の現実を「告発」するわけではなく、しかしことさらに覆い隠すのでもなく、淡々と言語化しながら青年に「やり直し」の機会を示唆し、「自分自身の身体からの生還」を期待する。

しかし、「やり場のなさ」を感じているのはこの青年にかぎったことではない。家族のいるもっと上の世代も同様の感覚を味わっている。生活保護で暮らす男性が描かれている断章を見てみよう。彼は毎日、妻が子どもたちに叫ぶのを聞き、彼女がつくった味気ない食事をすることに飽き飽きしている。彼の日課はテレビの前で昔の映画を見て過ごし、時々コンビニに牛乳を買いに行くか、近所の家でマリファナたばこを吸うことだけだ。保護され、衣食住には事足りても、自分が社会で有用であるという実感のもてない人間の悲しみが直截に伝わってくる (p. 60)。狩猟、

罾猟、漁労などで生計を立てていたかつての伝統的な暮らしの中では、男たちは長期間家を留守にしても、家族をその後何カ月も養えるだけの肉を持ち帰る英雄であり、家族を愛し、養う一家の主としての使命感をもっていた。ところが、伝統的な生活様式が崩れ、「保護」という名のもとに、白人によって押し付けられた現代的な生活様式が共同体の中に入ってくると、労働の場も減り、義務感も薄れ、自己の尊厳を模索しなければならなくなる。それは、男女を問わず居留地の住民全体にかかわる問題だが、部族の滅亡を食い止めるために1人でも多くの子どもを産み育てるという役割を意識的・無意識的に担っている女性たち⁶⁾以上に、男性たちにとっては深刻だ。その意味でも、彼らは一度自分たちのルーツを振り返ることが不可欠である。

4. 先住民たちの伝統的生活

フォンテーヌは先祖の土地に暮らしていたアニカシャーンという名の老人⁷⁾に語りかける。彼は「川や木々の名前、山々や谷、薬草や毒草の名前をそらんじることができ、風や季節、湿った雪や粉雪に名前をつけることができる (p. 79)」老人だ。妻に先立たれ、みずからの死期も遠くないことを自覚しながら、多くの孫や曾孫たちに囲まれて暮らしている。彼は、かつては猟師としてトナカイを撃ち、その皮を鞣して、みずから伐採したトウヒでつくった木枠にはめて民族の歌を高らかに奏でるための太鼓をつくったものだ。

そのような伝統的生活を営んでいたところに「町の間人たちが」やってきて、別の場所に居留地をつくるからと立ち退きを命ずる⁸⁾。従順にしたがう者もいるが、アニカシャーンは「挑戦、愛着、誇りからこの1片の土地を離れることを拒んでいる。インディアンの2本の足でじっと立ち、お腹は恐怖で膨れながらも、勇気をもって、かつてこの国を征服した最初の住人がもっていたとても古い勇気で抵抗している (p. 79-80)」。

『クエシパン』の3番目のセクションのタイトルにもなっている「ヌーチミット」は、かつてこのアニカシャーンが暮らしていた土地である⁹⁾。イヌー語で「土地の内部」を意味する。冬になると湖は凍り、道路として使われる。そうした場所で伝統的な生活続ける先住民はもはやごくわずかだが、皆無ではない。彼らは湖に氷が張る季節、野ウサギやヤマウズラやトナカイを待ち構えて何日もテント生活をする。トナカイの絶滅を危惧してエコロジストたちが指定した「立ち入り禁止」区域に彼らは敢然と入っていく。なぜなら、エコロジストたちが心配しているのは未来の生態系だが、先住民たちが気遣うのは現在の自分たちの家族のことだからだ。「安楽な生活が提案されてはいても、家族に新鮮な肉を与えるために、彼らが凍った湖を走り回ることを止めたことはけっしてない (p. 95)」。彼らは仕留めた獲物を無駄にすることなく、すべて利用し尽くす。

獣は、敬意をこめて、死ぬまで一晩そのままにしておく。翌日、男たちがトナカイの脚、頭、脇腹を解体する。毛皮はとっておく。職人がそれを鞣して、袋やモカシンや太鼓を作るだろう。女たちは男たちがもってきた大きな切り身を小さく切り分ける。彼女たちは大切そ

うに骨をとっておく。あとでそれを茹でて、髓と脂をとるのだ。冷めれば、焼きたてのパンに塗られた脂は宴でみんながもっとも欲しがるとなるだろう。何家族もの冷凍庫はすぐにくアチック（トナカイ）の肉でいっぱいになるだろう。（p. 95-96）

5. ノマド

このようにイヌーの伝統的な生活が喚起され、今なおそれを持続させようとする人々が存在するとしても、彼らが「自分は何者か」と自問せざるをえない状況に変わりはない。『クエシパン』の最初のセクションは〈ノマド（移動生活者）〉と題されている。かつてのイヌーたちは獲物を追って移住を繰り返すノマドだったとしても、そこはれっきとした自分たちの土地だった。ところが、居留地に「定住」するようになったことで、逆に借り物の土地で暮らしているという「放浪」感が強まる。加えて、フォンテーヌのように居留地と都会という2つの場所のはざままで生きる人間特有の漂流感覚もあるだろう。

幼くして居留地を離れ、都会で成長したフォンテーヌは、ある意味では、居留地に住む同胞以上に自分の出自を意識させられる機会が多かったはずだ。自分は仏系の多数派ではなく、英系の少数派エリートでもなく、同じ少数派でも、最近ケベックにやってきてケベック社会に溶け込もうとしている新移民でもない。都会では「イヌー」として扱われ、居留地に戻れば「町から来た娘」と見られる。普通の子どもでいたくても、いつも特別視される（Guy, 2011）。そのうえ、運命のいたずらにより、父親の存在も知らないとなると、出自へのこだわりはいつそう強まるにちがいない¹⁰⁾。したがって、ルーツを振り返る必要があるのがとりわけ男性たちだったとしても、女性たちもそれを完全に免れているわけではないのである。

フォンテーヌは、40歳になって自分の本当の姿を見出した女性について語る。おそらくそこに自分自身の未来の姿を重ね合わせながらである。その女性は「祖先の道筋をたどるために」ある体験旅行に出かける。「漕ぐこと、歩くこと、運ぶこと、キャンプすること、食べること、寝ること、立ち去ること、漕ぐこと、それが彼女の生活だった。彼女が一時選んだ生活。自分の祖先から借りたもの。選び取った後継者として（p. 76）」数日間の強行軍の末、彼女は、暖かい部屋で目覚めて砂糖とミルクのはいったコーヒーを飲む安逸な生活が恋しくなる。そして鏡を取り出す。

出発して以来、初めて、彼女は自分が背後に残してきたものにたいするうぬぼれあるいは悔しさから持参していた四角い鏡を取り出した。自分の肌が日焼けし、髪はべたつき、眉毛はぼさぼさで、疲れたように見えた。こんな自分の姿を見ることに怒っていると、突然彼女の顔は豹変した。数秒間、彼女は馴染み深い意志の反映、自分の母親のものだと知っている眼差しを見たように思った。自分自身の顔の上に母親の目。挑戦、戦い、探求、しかしもうけつて敗北ではない。彼女は初めて、この新しい一日の動じることのない現実と結びついたように思われる過去の息吹を吸い込んだ。（p. 75-76）

先祖の暮らしを疑似体験しようとして出た旅の途中で、それでも現代女性の「うぬぼれ」、あるいはささやかな自尊心から持参した「鏡」で己が姿を見る。するとどうだろうか？ そこに映っていたのは現在の自分ではなく、深い意志をたたえた母親の眼差しだったのだ。現在の自分が部族の歴史とつながった瞬間である。現代の安逸な生活に慣れた自分が先祖の暮らしに戻ることは所詮できない。にも拘わらず「彼女」にとってこの追体験は自分を肯定するために必要な儀式だった。遠い祖先とつながることで、ようやく未来を見据えることができるようになった「感謝」の瞬間だった。

6. 過去の継承、未来への眼差し

過去とのつながりを回復することによって初めてもちうる未来に向かう意志は随所にうかがえる。居留地におけるイヌーの男性と白人女性の結婚式の場面を見てみよう。カナダにもケベックにもメティスは多いとはいえ¹¹⁾、白人女性がイヌー社会に入るのは稀なことだろう。

彼らは未開人のように互いを愛することを選んだ。法的束縛のない、純粋な愛。ずっと愛し続けます。恋人たちは招待客一人一人にそう繰り返す。彼らはその返事として、感謝の気持ちであるかのようにうなずいてもらう。

薄紫色のドレスの娘は正装した恋人に自分の身体を押し付ける。彼女は彼を愛している。
(p. 42-43)

1つの社会が伝統を継承していくことは重要だが、現代においては外界との接触が不可避である。ケベック州はまさしくこの問題を問い続けて今日の間文化社会を築いてきた。18世紀中葉の植民地戦争で英国に敗北して以降、仏系住民たちは英国の支配下に入り、その中で200年以上、言語（フランス語）と文化（カトリック）を守りながらひたすら「生き延びる」ことに腐心してきた。変化が訪れたのは1960年代の「静かな革命」以降である。今ここでその詳細に立ち入ることはできないが、政権交代をきっかけにして起こったこの「革命」と呼んでもよいような、エネルギー、金融、教育等の主要分野における急速な改革・近代化のもとで、州の中で多数派だった仏系住民が主権を取り戻し、「我が家の主人」となった。と同時に、細々と、しかし純粋に生き延びてきた状況から一転して、異なるものに開かれ、それらを受け入れながら自らのアイデンティティをたえず更新していく必要に迫られるようになったことだけを想起しておこう¹²⁾。このような歩みは先住民社会が抱えている課題とも共通する点が多いし、さらに言えば、異なるものどうしの共存という現代のグローバル化した社会全体に突き付けられている課題とも一致する。

先の引用に見た結婚式の場面は、結婚を宗教的ないしは国家的な契約の儀式とみる西欧文化と、その対極にあるとも見えるイヌー社会のしきたりとが「愛」の名のもとに結び合わされる場面だった。イヌーの結婚は、「サインすべき書類も、唱えるべき誓いも、長い挨拶もなしに」、ただ「ス

カーフと紐で互いの手を結ぶだけ (p. 42)」で完了する。愛し合う新郎新婦と、彼らと喜びを分かち合おうとする招待客の様子を描くフォンテーヌの筆致に一抹の不安がないといったら嘘になるかもしれない。しかし、祝宴の場における歓喜はそうした不安を掻き消しているように思われる。

過去と未来をつなぐのは、最後の断章に登場するニクスという名の子どもである。

おまえは湾の細かい砂の上に指先で1本の木を描くだろう。気晴らしといえば、波の寄せ返しがあるだけだろう。おまえの前方にある無限、空の青さにまでつづく流れに従う水。7月の暑い1日の平凡な穏やかさ。わたしが子どものころ泳いだ場所をおまえは見るだろう。土地でさえ人間の気まぐれで形を変える。豊かさをもたらさないもの無頓着さによって汚される水。おまえの幼年時代がわたしの7年間を力づけてくれるだろう。まばゆい物たちに向けられた新しい眼差し。おまえの笑い声はわたしの希望の木霊だろう。太陽はわたしたちのぼんやりした視線の下に沈むだろう。霧も、雨も、生き物を窒息させる重々しすぎる過去も、ない。わたしたちの将来の夢を取り巻く沈黙。岸边と潮のそばに、わたしたちがいるだろう、ニクスよ。(p. 111)

幼い息子とともに見るであろう故郷の風景。彼は海岸の砂の上に指先で絵を描いて遊んでいる。彼の前にあるのは波の寄せ返しと無限、空の青さにつながる海の青さだ。彼はフォンテーヌが居留地で過ごした最初の7年間の記憶をよみがえらせ、生き直させてくれるにちがいない。この断章がすべて単純未来形(～だろう)で書かれていることに注目しよう。『クエシパン』はこのように、未来を志向し、未来に開かれたまま作品を閉じる。

7. おわりに

ナオミ・フォンテーヌの『クエシパン、あなたへ』は居留地の同胞たちに、あるときは2人称で語りかけ、またあるときは彼(女)らの置かれている状況を3人称でやや遠くから描いた一連のスケッチで構成されている。「わたし」と対象とのあいだにある距離は作家自身が自己を見つめるのに必要な距離でもある。フランス語で親しい相手に話しかけるときに用いられる代名詞« tu »やその強勢形の« toi »が多用されているとはいえ、Cassandre Sioui がいみじくも指摘するように、その語りかけは一方的で、「わたし」と「あなた」のあいだに「対話」が成立しているとはいえない、「あなたがた」どうしの対話も聞こえてこない(Sioui, 2014, p. 78)。そのため沈黙や静寂、一種の悲しみが感じられる場面も少なくない。自己を肯定するための言葉そのものを探している者との「対話」はけっして容易ではない。

これまで、ケベック州に住む先住民たちは連邦政府による「インディアン法」で保護されてき

た。しかし、その「保護」は彼らに「認定インディアン」というレッテルを貼る「差別」と紙一重のものでもあった。1970年以降の多文化主義政策により、居留地の中には自治を行うところも増えている（浅井、2004、p. 26）。一方、カナダの中でも独自の間文化社会の構築を目指すケベック州の場合、州内の先住民コミュニティに積極的に関わり、ともに間文化社会を築いていこうとする動きもある。Daniel Chartierも指摘しているように、とりわけイヌーについては、彼らが書かれた文学作品（伝統的な口承文学ではなく）を発表するときにケベック州の出版社からイヌー語とフランス語を併用したり、フランス語のみを使用したりして出版する傾向が強いことから¹³⁾、イヌー文学を21世紀のあらたな「ケベック（における）文学」として扱おうとする動きが顕著である¹⁴⁾。それが「ケベックにおける1つの文学」に留まるのか、それとも「ケベックの文学」の1形態になるのか、はたまた「ケベック文学」の一部をなすことになるのか、現時点で予測することは難しいが、いずれにせよ、1980年代以降、ケベックにおける間文化社会推進の流れのなかで移民文学が脚光を浴びたことの延長線上で考察できる点が多いのは確かである。社会的マイノリティがいかにすれば自他ともに尊厳を認められるか、異なる者どうしはどうすれば共存できるか、出自の社会とホスト社会の関係、伝統的価値観と新しい価値観との相克、その中での集団的記憶、根無し草の意識、癒しの手段としての文学のあり方など、80年代にケベックにおける移民文学のテーマだったものが、21世紀の現在、先住民との関係を考えるうえでの主要なテーマとなっている。

これらの問題を掘り下げるためにはもちろん社会学的なアプローチが必要だが、文学というフィクションを通して考察される余地もけっして小さくはない。ナオミ・フォンテーヌが語ることはすべてが事実に忠実とはかぎらない。居留地という狭いコミュニティの中での出来事をそのまま語るのはあまりにデリケートである。彼女は『クエシパン』の冒頭から次のように述べて、この作品があくまで「小説」であることを断っている。

わたしはいろいろな人の人生を捏造した。太鼓をもった男は一度もわたしに身の上話をしてくれなかった。わたしは彼の使い古された手、曲がった背中から物語を組み立てたのだ。(…)そして別の人たちの人生を、美化した。美しいものを見たかった、作り出したかったのだ。(…)作り直された居留地。(p. 9)

居留地の内と外の両方を知っている彼女がときに脚色を施しながら抑制のきいた筆致で明かすこの場所の現状や同胞への思いは、社会学的アプローチとはまた一味ちがった「証言」としての意味をもっているのではないだろうか。

注

- 1) イヌイットと同様、「人間」を意味するが、民族的には両者はまったく異なる。かつてはフラン

スから来た最初の探検家たちによる命名で「モンタニエ」（「山の民」の意）と呼ばれていたが、1990年以降「イヌー」が正式名称となった。イヌーの大半（推定2万人）はケベック州に住む。以下参照。<http://dictionnaire.sensagent.leparisien.fr/Innus/fr-fr/>（2019年8月12日アクセス）

- 2) ビーバーなどの毛皮がヨーロッパで流行したため。
- 3) 「大きな湾」の意味。
- 4) 先住民に定住を促し、彼らと白人が住み分けることを目的としたもので、現在もカナダ全体で2,200カ所以上、ケベック州内だけでも25カ所ほどの居留地がある（浅井、2004、p. 89；カナダ大使館、2015；池上、2009、p. 120 他参照）。
- 5) 以後、*Kuessipan* からの引用は直後に頁数のみ示す。
- 6) 以下を参照せよ。「妊娠しない危険は妊娠する危険より大きい。彼女たちはみな子どもを産みだっている。（中略）これほどまでに大量虐殺されようとした部族を大きくするための方法、生きるため、あるいは死ぬのを食い止めるための激怒。子どもだ。」（p. 85）。
- 7) フォンテーヌの母方の祖父の名前（p. 36 参照）。「アレクサンドル」に相当するイヌー語の名前。
- 8) 理由は、水力発電のためのダム建設、製紙業のための森林伐採、鉱山（アルミニウム）開発など、さまざまである。
- 9) イヌーを代表するもう1人の作家ジョゼフィーヌ・バコン（Joséphine Bacon, 1947-）はペッサミット生まれだが、生後5年間、このヌーチミットで半ばノマドの生活を送っている。Yvon（2019）参照。
- 10) 根無し草の意識については、Papillon（2016）やVaillancourt（2017）も詳細に論じている。
- 11) カナダのメティスは主として平原地方（アルバータ州東南部からマニトバ州西南部にまたがる）に住んでいる（浅井、2004）。ケベックに住むメティスは約3万人だが、一説では、ほとんどのケベコワには先住民の血が流れているとも言われる。
- 12) ケベックの「間文化主義」の理論と実践についてはすでに多くの研究があるが、とりわけBouchard（2012）を参照されたい。
- 13) ジェゼフィーヌ・バコンはフランス語とイヌー語の2言語出版、ナオミ・フォンテーヌはフランス語で出版している。
- 14) イヌイット文学の場合はその限りではない。イヌイットは他のカナダの州あるいは他の国に住むイヌイットとの横のつながりが強く、イヌイット語での出版が基本となるため、距離がある。詳しくはChartier（2019b）参照。

参考文献

- 浅井晃（2004）『カナダ先住民の世界』 彩流社
- Bouchard, G. (2009). *Uashat*. Montréal: Boréal.
- ブシャール, G. (2017) 『間文化主義：多文化共生の新しい可能性』（丹羽卓 監訳）彩流社. [原著：Bouchard, G. (2012). *L'Interculturalisme, Un point de vue québécois*. Montréal: Boréal].
- カナダ大使館（2015）「ファースト・ネーションズ（先住民族インディアン）」
https://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/faq-first_nations-indien.aspx?lang=jpn（2019年8月12日アクセス）

- Caron, J.-F. (2019). La plume autochtone / émergence d'une littérature. *Lettres québécoises (la revue de l'actualité littéraire)*, 147, 12–15.
- Chartier, D. (2017). La réception critique des littératures autochtones. *Kuessipan* de Naomi Fontaine. In G. Dupuis & K.-D. Ertler (Eds.), *À la carte. Le roman québécois (2010–2015)* (pp. 167–184). Frankfurt am Main: Peter Lang.
- シャルティエ, D. (2019a) 『北方の想像界とは何か？ 倫理上の原則』(多言語出版、日本語訳：小倉和子・河野美奈子) Rovaniemi: Arctic Arts Summit/Montréal: Imaginaire|Nord.
- Chartier, D. (2019b). La fascinante émergence des littératures inuite et innue au 21^e siècle au Québec: Une réinterprétation méthodologique du fait littéraire. *Revue japonaise des Études québécoises*, 11, 27–48.
- Durand, M. (2011). Carnets du Nord (7) — Prise de parole, *Le Devoir*, samedi 6 août.
- Fontaine, N. (2011). *Kuessipan: à toi*, Montréal: Mémoire d'encrier.
- Fontaine, N. (2017). *Manikanetish: Petite Marguerite*. Montréal: Mémoire d'encrier.
- Fontaine, N. (2019). *Shuni*, Montréal: Mémoire d'encrier.
- Gatti, M. (2009). *Littérature amérindienne du Québec*. Montréal: Bibliothèque québécoise.
- Guy, Ch. (2011). Naomi Fontaine: bons baisers de la réserve. *La Presse*, 13 mai.
- 池上伸啓 (2009) 「先住民」小畑精和・竹中豊 (編著) 『ケベックを知るための 54 章』明石書店 pp. 119– 126
- Papillon, J. (2016). Apprendre et guérir: Les rapports intergénérationnels chez An Antane Kapeshe, Virginia Pésémapéo Bordeleau et Naomi Fontaine. *Recherches amérindiennes au Québec*, 46 (2–3), 57–65.
- Sioui, C. (2014). *De l'enchevêtrement des frontières à la précarité identitaire : une étude de la représentation des lieux dans Ourse bleue de Virginia Pésémapéo Bordeleau et Kuessipan de Naomi Fontaine*, Mémoire de maîtrise, Université de Sherbrooke.
- Vaillancourt, M.-È. (2017). Un héritage à habiter: Lecture géopoétique de *Kuessipan / À toi et de Puamun, le rêve*, de Naomi Fontaine. *Recherches amérindiennes au Québec*, 47 (1), 25–34.
- Yvon, A-M. (2019). Joséphine Bacon, la vie en trois temps d'une femme d'exception. *Radio-Canada, Espaces autochtones*, le 8 mars.
<https://ici.radio-canada.ca/espaces-autochtones/1155819/josephine-bacon-innue-poete-autochtone-histoire> (2019年8月12日アクセス)
- Innu-aimun, Ressources de langue*,
<https://www.innu-aimun.ca/> (2019年8月12日アクセス)